



【店頭FXチャート】テクニカル説明書

2017年2月27日版

Copyright© 2001-2017 kabu.com Securities Co., Ltd. All rights



カブドットコム証券
わたしたちは MUFG です。

〈トレンド系〉

単純移動平均線	4
指數平滑移動平均線	4
エンベロープ	5
ボリンジャーバンド	5
HL バンド	6
ケルトナーチャネル	6
カオス・アリゲーター	7
パラボリック	7
ジグザグチャート	8
線形回帰トレンド	8
アルーン	8
バランスオブパワー	9
一目均衡表	9
高安移動平均	10
ピボット	10
GMMA	11
スーパーボリンジャー	11
スパンモデル	11
かぎ足	11
平均足	12
新値足	12
陰陽足	12
ポイント&フィギュア	13

〈オシレーター系〉

MACD	13
モメンタム	14
A/D ライン	14
AC オシレーター	15
オーサムオシレーター	15
ブルパワー	16
ベアパワー	16
デマーカー	16
RSI	17
ストキャスティクス	17
ウイリアムズ%R	18

サイコロジカルライン	19
DMI	19
ADX	19
ADXR	20
RCI	20
ROC	20
移動平均乖離率	20
強弱レシオ	21
プライスオシレーター	22
DPO	22
コボック指標	22
CCI	22
ボラティリティ	23
ATR	23
可変 MACD	23
シャンデモメンタムオシレーター	23
チャイキンオシレーター	24
アルティメットオシレーター	24

■ 単純移動平均線

1. 相場と単純移動平均線

相場が移動平均線よりも上にあるときに強気、下にあるときは弱気、というのが基本的な見方になります。

さらに、相場が移動平均線を下から上に抜けたときが買いシグナル、上から下に移動平均線を抜いたときに売りシグナルとされています。

2. 単純移動平均線

3 種類の移動平均線の中で短期の線が長期の線を下から上に突き抜けたときをゴールデンクロスと呼び、強い買いシグナルとされています。逆に、短期の線が長期の線を上から下に抜けたときはデッドクロスと呼ばれ、強い売りシグナルとされています。

3. 抵抗線と支持線

移動平均線は、相場の上昇局面では上値抵抗線（上昇を抑えようとする線）、下降局面では下値支持線（下降を跳ね返そうとする線）としても注目されています。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ローソク足が移動平均線を上から下に抜けたとき
- ・移動平均線がデッドクロス（短期の線が長期の線を上から下に抜けたとき）

買いシグナル

- ・ローソク足が移動平均を下から上に抜けたとき
- ・移動平均線がゴールデンクロス（短期の線が長期の線を下から上に突き抜けたとき）

■ 指数平滑移動平均線

指数平滑移動平均（EMA）は指数関数的に重みを減らし、直近の数値の比重を高めて計算する移動平均のことです。

単純移動平均や加重移動平均と比較して、直近値の算入割合が高いため反応が早く、短・中期的な分析に用いられる事が多くあります。また、単純移動平均に比較し、「だまし」が少ない指標とされています。

EMA の向きや EMA と相場の組み合わせで買いシグナル、売りシグナルが判断されます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・EMA が下向きで弱気相場
- ・EMA が上向きまたは横ばいから下向きに転じたとき

- ・ローソク足が EMA を上から下に抜けたとき

買いシグナル

- ・EMA が上向きで強気相場
- ・EMA が下向きまたは横ばいから上向きに転じたとき
- ・ローソク足が EMA を下から上に抜けたとき

■エンベロープ[®]

エンベロープは、移動平均線の上下に一定の乖離幅にて帯（バンド）を描き、相場変動を推定する指標です。

中央の線は移動平均線で、その線を挟んで上側 2 本、下側 2 本で構成され、上下 4 本の線を使い相場を分析します。

中央の線を挟む内側 2 本の線が第一売買シグナル、外側 2 本の線が強い売買シグナルとされています。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・中央線の上側 2 本線のうち、内側（第 1 バンド）の線に到達したとき
- ・中央線の上側 2 本線のうち、外側（第 2 バンド）の線に到達したときに強い売りシグナル

買いシグナル

- ・中央線の下側 2 本線のうち、内側（第 1 バンド）の線に到達したとき
- ・中央線の下側 2 本線のうち、外側（第 2 バンド）の線に到達したときに強い買いシグナル

■ボリンジャーバンド

過去の相場変動から将来の相場変動を推定する指標です。

過去の相場変動が移動平均に対して、 $\pm 1\sigma$ の範囲内に収まる確率が 68.27%、 $\pm 2\sigma$ の範囲内に収まる確率が 95.45%、 $\pm 3\sigma$ の範囲内に収まる確率が 99.73% だったので、将来の相場変動もこの範囲内に収まる可能性が高いと推定します。

バンドの幅が狭くなったときは、保合い相場と共にトレンドの始まりを示唆し、バンドの幅が広くなったときは、ボラティリティの高さと共にトレンドの終焉を示唆します。

また、バンドから上下に離れた場合は、異常値と判断し相場の転換と見なします。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ローソク足が移動平均線を下抜けたとき

- ・ローソク足が -1σ （移動平均線に近い線）に到達したとき
- ・ -1σ を突き抜け -2σ まで達したときはさらに強い売りシグナル

買いシグナル

- ・ローソク足が移動平均線を上抜けたとき
- ・ローソク足が $+1\sigma$ （移動平均線に近い線）に到達したとき
- ・ $+1\sigma$ を突き抜け $+2\sigma$ まで達したときはさらに強い買いシグナル

■ HL バンド

過去の一定期間の高値・安値同士を繋ぎ、その中間に線を引いた、3 本の線で構成されます。

高値のバンドを High バンド（H バンド）、安値のバンドを Low バンド（L バンド）と呼びます。

中間線がトレンド、High バンド（H バンド）が抵抗線、Low バンド（L バンド）が支持線と考えます。

High バンド（H バンド）を抜けると買い傾向、Low バンド（L バンド）を抜けると売り傾向とみます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ローソク足が L バンドを下に抜けた、L バンドに張り付いたとき
- ・ローソク足が H バンドに達したとき
- ・ローソク足が中間線を上から下に抜けたとき（一般的に決済時に使用されます）

買いシグナル

- ・ローソク足が H バンドを上に抜け、H バンドに張り付いたとき
- ・ローソク足が L バンドに達したとき
- ・ローソク足が中間線を下から上に抜けたとき（一般的に決済時に使用されます）

■ ケルトナーチャネル

ケルトナーチャネルは移動平均線に加え、上下 2 本のバンドから構成され、値動きがケルトナーチャネルの上下のバンドを抜けた方向に、強いトレンドがあると判断します。

RSI などのオシレーターと併用しての分析手法もあります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ローソク足が上部のバンドを上抜けたとき

買いシグナル

- ・ローソク足が下部のバンドを下抜けたとき

■カオス・アリゲーター

カオス・アリゲーターは、一般にはトレンドの収束と拡散の動きを探る指標です。

平滑移動平均線を3本組み合わせたテクニカル指標です。3本の線をそれぞれワニの顎（Jaws）、歯（Teeth）、唇（Lips）に見立て、ワニが口を開閉する様子から名付けられました。

3本のラインが収縮、あるいは拡散をし始めた地点に注目します。上昇、下降の相場に沿って順張りをし、再び収束し始めた場合、決済ポイントと判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・収縮した3本のラインが拡散した場合に、価格上昇が続いているとき

買いシグナル

- ・収縮した3本のラインが拡散した場合に、価格下降が続いているとき

■パラボリック

SAR (Stop And Reverse Point) という丸いラインを用いて売買サインを示します。

パラボリックは上昇線と下降線の2本の線と相場の位置関係で売買シグナルの判断を行うトレンド系指標（トレンドを探る指標）です。

見方としては、上昇している SAR が下降しているローソク足と接触した地点が売りサイン、下降している SAR が上昇しているローソク足と接触した地点が買いサインとなります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・上昇している SAR が下降しているローソク足と接触したとき

買いシグナル

- ・下降している SAR が上昇しているローソク足と接触したとき

■ジグザグチャート

相場の大きな流れを見るための指標です。

直近の高値及び安値からどの程度の上昇・下降があったかを%で、直近の反転から何本で反転が起きたかをカウントで表示しています。

主に天底の判断に使われる指標のため、他のテクニカルと併用するのが一般的です。

■線形回帰トレンド

中央の線は回帰線で、その線を挟んだ内側2本の線が第1標準誤差、外側2本の線が第2標準誤差です。回帰線は相場変動の中央の値を通るよう計算された線で、相場が大きく変動してもこの線に回帰する（戻ってくる）習性があるとの考えに基づいた分析手法です。

過去の終値の線形回帰直線を算出することで、トレンドの有無を判断します。一般的には、回帰直線の傾きが正ならば上昇トレンド、負であれば下降トレンドと判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ローソク足が回帰線を上から下に抜けたとき
- ・ローソク足が第1標準誤差の上側ラインに達したとき
- ・ローソク足が第2標準誤差の上側ラインに達したときに強い売りシグナル

買いシグナル

- ・ローソク足が回帰線を下から上に抜けたとき
- ・ローソク足が第1標準誤差の下側ラインに達したとき
- ・ローソク足が第2標準誤差の下側ラインに達したときに強い買いシグナル

■アルーン

アルーンは、トレンドが発生しているか、トレンドがどのくらい強いかを判断するための指標です。

アルーン UP とアルーン DOWN の2本の線で構成されています。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・アルーン DOWN がアルーン UP を下から上に突き抜けたとき

アルーン DOWN が 100 になると下降トレンドの始まりを示唆し、その後も 70 以上で安定して推移する場合は、下降トレンドが形成されたことを意味します。

買いシグナル

- ・アルーン UP がアルーン DOWN を下から上に突き抜けたとき

アルーン UP が 100 になると上昇トレンドの始まりを示唆し、その後も 70 以上で安定して推移する場合は、上昇トレンドが形成されたことを意味します。

■バランスオブパワー (BOP)

相場が強気か弱気かの強度を測定し、トレンドが継続するのか、あるいは天井・底なのかどうかを見極めるための指標です。主に RSI などと併用するのが一般的です。

<判断方法>

売りシグナル

- ・安値を更新しているにも関わらず、バランスオブパワーは安値を更新しないとき
- ・RSI などで売りサインが出ている場合に、バランスオブパワーがゼロラインに近い水準で推移しているとき

買いシグナル

- ・高値を更新しているにも関わらず、バランスオブパワーは高値を更新しないとき
- ・RSI などで買いサインが出ている場合に、バランスオブパワーがゼロラインに近い水準で推移しているとき

■一目均衡表

日本発のテクニカル指標であり、相場を視覚的に捉えられる指標です。

一目均衡表は、基準線、転換線、3 種類のスパン（先行スパン 1、先行スパン 2、遅行スパン）の 5 つの線で形作られています。また先行スパン 1 と先行スパン 2 の間を雲（帯）と呼びます。

ローソク足が雲の下に位置している場合、雲は抵抗帯となる場合があり、ローソク足が雲の上に位置している場合、雲は支持帯となる場合があります。

また、雲を作る先行スパン 1 と先行スパン 2 がクロスした場合、トレンドの転換や、急激に上昇或いは下降する傾向があります。

一般的には、転換線が基準線を下から上に抜けたときを買い傾向と判断し、転換線が基準線を上から下に抜けたときを売り傾向と判断します。

<判断方法>

売りシグナル

- ・転換線が基準線を上から下に抜いたとき
- ・ローソク足が雲を上から下に突き抜けたとき
- ・遅行スパンが 26 本前のローソク足を上から下に抜いたとき

- ・現在のローソク足が雲の下にあるときは、弱気相場の継続

買いシグナル

- ・転換線が基準線を下から上に抜いたとき
- ・ローソク足が雲を下から上に突き抜けたとき
- ・遅行スパンが 26 本前のローソク足を下から上に抜いたとき
- ・現在のローソク足が雲の上にあるときは、強気相場の継続

■高安移動平均

一定期間の高値と安値を用いて、高値移動平均線(HMA)と安値移動平均線(LMA)の 2 本の線で描かれます。一般的には、高値移動平均線を相場の上値の目安、安値移動平均線を下値の目安として判断します。

<判断方法>

売りシグナル

- ・高値移動平均線に到達したとき
- ・ローソク足が高値移動平均線を抜けた場合でも、下降に転じて高値移動平均線を上から下に抜いてきたときには強い売りシグナル

買いシグナル

- ・安値移動平均線に到達したとき
- ・ローソク足が安値移動平均線を抜けた場合でも、上昇に転じて安値移動平均線を下から上に抜いてきたときには強い買いシグナル

■ピボット

ピボットポイント（基準線）、S 1（抵抗線 1）、S 2（抵抗線 2）、B 1（支持線 1）、B 2（支持線 2）の 5 本の線と HBOP（ハイブレークアウトポイント）および LBOP（ローブレークアウトポイント）の値を利用して売買シグナルの判断が行われている指標です。

<判断方法>

売りシグナル

- ・ピボットが S1、S2 に到達するということは、レジスタンスラインに到達したことを意味しており、価格が今後反転し下落する可能性が高いと判断し、売りシグナルと判断します。S1 は第 1 のレジスタンス、S2 が第 2 のレジスタンスとして考えます。慎重を期す場合は、HBOP を売りポイントを考えますが、HBOP は損切りポイントとして捉えることもできます。

買いシグナル

・ピボットが B1、B2 に到達するということは、サポートラインに到達したことを意味しており、価格が今後反転し上昇する可能性が高いと判断し、買いシグナルと判断します。B1 は第 1 のサポート、B2 が第 2 のサポートとして考えます。慎重を期す場合は、LBOP を買いポイントを考えますが、LBOP は損切りポイントとして捉えることもできます。

■GMMA

GMMA は、短期の移動平均線 6 本と長期の移動平均線 6 本を組み合わせたテクニカル指標です。

一般的には、短期線が長期線にぶつかって反発した場合や、短期線が長期線とクロスしたところを売買のポイントと判断します。

■スーパーボリンジャー

柾木利彦氏（マーフィー）が考案した指標で、ボリンジャーバンドをベースに遅行スパンを加えたテクニカル指標です。

■スパンモデル

柾木利彦氏（マーフィー）が考案した指標で、一目均衡表をベースとした独自のテクニカル指標です。

■カギ足

カギ足は、時間の概念を考慮せず、相場変動だけを記録する非時系列の指標です。

直近の高値を抜いたときに買いシグナル、直近の安値を抜いたときに売りシグナルとするのが基本的な見方です。

＜判断方法＞

売りシグナル

下落から上昇に転換した時の横線を肩、上昇から下落に転換した時の横線を腰と呼びますが、直前の肩を上に抜いた場合を買いシグナルとして判断します。

買いシグナル

下落から上昇に転換した時の横線を肩、上昇から下落に転換した時の横線を腰と呼びますが、直前の腰を下に抜いた場合を売りシグナルと判断します。

■ 平均足

平均足は、トレンドを視覚的に捉えやすいよう、ローソク足に修正を加えた指標です。

判断方法は、陽線は上昇トレンド、陰線は下落トレンドとしてみるほか、実体部分が前日の実体部分より短い場合や、上下にヒゲの長い足があらわれた場合などに、トレンド転換の可能性が高いと見ます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・下ヒゲの長い陽線が出現したとき

買いシグナル

- ・上ヒゲの長い陰線が出現したとき

■ 新値足

新値足は、売買タイミングを非常にシンプルに捉える指標の一つです。判断方法は、ローソクの色が変化したときが売買タイミングとなります。

短期の売買判断を行うにはパラメーターを 3、中期ではパラメーターを 5、長期ではパラメーターを 10 とするのが一般的です。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・新しい陰線が出現（陰転）した後、さらにもう 1 本陰線が出現したとき

買いシグナル

- ・新しい陽線が出現（陽転）した後、さらにもう 1 本陽線が出現したとき

■ 陰陽足

陰陽足の陽転、陰転で相場のトレンドを判断する指標です。

短期、中期、長期の陰陽足がそれぞれ短期、中期、長期のトレンドに対応します。

陰陽足が陽転したときに上昇トレンド開始、陰陽足が陰転したときに下降トレンド開始と見ます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・短期、中期、長期の陰陽足が揃って陽転したとき

買いシグナル

短期、中期、長期の陰陽足が揃って陰転したとき

■ポイント&フィギュア

時間の概念を考慮しない非時系列のテクニカル指標です。

×（上昇）と○（下降）の位置および数で売買タイミングを計ります。値幅を設定し、その値幅以上に上昇、下落した場合に印が書き加えられます。

また、カウンティング（水平カウンティングと垂直カウンティングの2種類）という目標値の計算にも利用されることに特徴があります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・直近の○印を1つ下回ったとき（ダブルボトム型）
- ・高値が切り下がりながらダブルボトム型が形成されたとき（弱気信号）
- ・2つ手前の抵抗帯の○印を1つ下回ったとき（トリプルボトム型）
- ・強弱均衡から下離れしたとき（弱気の三角保ち合い）

買いシグナル

- ・直近の×印を1つ上回ったとき（ダブルトップ型）
- ・底値が切り上がりながらダブルトップ型が形成されたとき（強気信号）
- ・2つ手前の抵抗帯の×印を1つ上回ったとき（トリプルトップ型）
- ・強弱均衡から上離れしたとき（強気の三角保ち合い）

カウンティング

- ・保ち合い期間の3倍相場が変化するという理論（水平カウンティング）
- ・前回の上昇または下降と同じ幅の上昇または下降が表れるという理論（垂直カウンティング）

■MACD

MACDは、MACDとシグナル線の位置関係で判断する見方とゼロラインとの位置関係で判断する見方があります。

MACDがシグナルを上下に抜けた地点が売買サイン、ゼロラインを強弱分岐点と見ます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・MACDがシグナル線を上から下に抜いたとき（デッドクロス）

- ・MACD がシグナル線を上から下に抜いた後、両方の線がゼロラインを下に抜けたとき
- ・MACD がゼロラインを下抜けければ弱気相場

買いシグナル

- ・MACD がシグナル線を下から上に抜いたとき（ゴールデンクロス）
- ・MACD がシグナル線を下から上に抜いた後、両方の線がゼロラインを上に抜けたとき
- ・MACD がゼロラインを上抜けければ強気相場

■モメンタム

モメンタムは相場の先行指標として利用され、ゼロを基準に強弱を判断します。

モメンタムがゼロ以上のときは強気相場と判断し、モメンタムがゼロ以下のときは弱気相場と判断します。

モメンタムは相場に先行して動くという特徴があり、相場がトップ（ボトム）をつける前にモメンタムがトップ（ボトム）をついた場合、それがトレンドの反転・終息のサインとなります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ゼロラインを上から下に抜けたとき
- ・ゼロ以下のときに弱気相場

ただし、ゼロ以下の状態からさらに勢いを増して下降する場合は、買いの準備とされています。

買いシグナル

- ・ゼロラインを下から上に抜けたとき
- ・ゼロ以上のときに強気相場

ただし、ゼロ以上の状態からさらに勢いを増して上昇する場合は、売りの準備とされています。

■A/D ライン

Accumulation（集積）と Distribution（離散）を表示し、トレンド転換のタイミングをはかる指標です。ここで使用しているのは、一般にウィリアムズ A/D ラインと呼ばれている指標です。

相場の上昇時に A/D ラインが下降している場合、もしくは、相場が下降している際に A/D ラインが上昇している場合など逆行が起こっている場合にトレンド転換と考えます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・相場が上昇している際に A/D ラインが下降しているとき（逆行現象）

買いシグナル

- ・相場が下降している際に A/D ラインが上昇しているとき（逆行現象）

■AC オシレーター

トレンドの方向性と強さを表示する指標です。

一般に、ゼロラインを上回っている場合は上昇トレンド、下回っている場合は下降トレンドと考えます。

トレンドの強弱は陽線、陰線で表示されており、陽線、陰線の転換をトレンドの転換と考えます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ゼロラインを下回り、（AC 下降）が継続しているときは下降トレンドが発生

買いシグナル

- ・ゼロラインを上回り、（AC 上昇）が継続しているときは上昇トレンドが発生

■オーサムオシレーター

売られ過ぎ、買われ過ぎや、転換点を判断するテクニカルです。

主に、ゼロラインを基準として、ゼロラインより上方であれば、上昇トレンド、下方であれば下降トレンドと判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ゼロラインを上から下抜けたとき
- ・ゼロラインより下での水準で上昇し、ゼロラインを超えずに再度下降したとき

買いシグナル

- ・ゼロラインを下から上抜けたとき
- ・ゼロラインより上の水準で下落し、ゼロラインを割らずに再度上昇したとき

■ブルパワー

13 日の指標平滑移動平均の乖離率で、表面下の買い、売り気配の勢力を判断します。

ゼロラインより上方の場合は強気と判断し、買いシグナル、下方の場合は中立と考えます。ベアパワーと併用するのが一

一般的です。

＜判断方法＞

買いシグナル

- ・ベアパワーが 0 より下で上昇しているとき
- ・ブルパワーの直近の高値が前回の高値を上回っているとき

■ベアパワー

13 日の指標平滑移動平均の乖離率で、表面下の買い、売り気配の勢力を判断します。ゼロラインより下方の場合は弱気と判断し、売りシグナル、上方の場合は中立と考えます。ブルパワーと併用するのが一般的です。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ブルパワーが 0 より上で下降しているとき
- ・ベアパワーの直近の安値が前回の安値を下回っているとき

■デマーカー

デマーカーは、単純移動平均線を用いたテクニカル指標で、数値は 0 から 1 までの範囲内で推移します。0 に近いほど安値圏で、1 に近いほど高値圏になります。

また、デマーカーが 0.5 以下から 0.5 以上へ上昇した地点が買いのエントリーポイント、デマーカーが 0.5 以上から 0.5 以下へ下落した地点が売りのエントリーポイントとみる事もあります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・デマーカーが 0.7 以上で、デマーカーの数値が下落したとき（上昇トレンドから下降トレンドへの転換点）
- ・デマーカーが 0.5 以上から 0.5 以下へ下落したとき

買いシグナル

- ・デマーカーが 0.3 以下で、デマーカーの数値が上昇したとき（下降トレンドから上昇トレンドへの転換点）
- ・デマーカーが 0.5 以下から 0.5 以上へ上昇したとき

■ RVI

ボラティリティが拡大しているか、縮小しているかを判断する指標です。

上昇トレンドでは、終値が始値より高く、下降トレンドでは終値が始値より低いという考え方を元にしています。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ RVI がシグナルラインを上から下抜けたとき
- ・ RVI がゼロラインを下抜けたとき

買いシグナル

- ・ RVI がシグナルラインを下から上抜けたとき
- ・ RVI がゼロラインを上抜けたとき

■ RSI

RSI は、「相対力指数」と言われ、過去の一定期間の相場の強弱を表す指標です。RSI の見方は、売られ過ぎ・買われ過ぎ水準、逆行現象です。

RSI が 75～80%以上のときが買われ過ぎ水準、RSI が 20～25%以下のときが売られ過ぎ水準となります。

逆行現象は相場の反転のサインとして使用します。逆行現象（相場上昇、RSI 下降）=その後の相場の反転下降サイン、逆行現象（相場下落、RSI 上昇）=その後の相場の反転上昇サインと判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ RSI が 75～80%近辺以上で買われ過ぎの水準と判断
- ・ RSI が 50%より下で推移していると下落の勢いが強いと判断

買いシグナル

- ・ RSI が 20～25%近辺以下で売られ過ぎの水準と判断
- ・ RSI が 50%より上で推移していると上昇の勢いが強いと判断

■ストキャスティクス

ストキャスティクスは、買われ過ぎ、売られ過ぎを見るための指標です。

%K、%D、Slow%D の 3 本の線が描かれます。

1. 値で判断

最も基本的でシンプルな判断方法は、%K または%D が 75%以上で買われ過ぎ（売りシグナル）を示唆、25%以下で売られ過ぎ（買いシグナル）を示唆すると考えるものです。

さらに、%K または%D が 80%以上のときに値が下降に転じたときは強い売りシグナル、20%以下のときに値が上昇に転じたときに強い買いシグナルとされています。

2. ゴールデンクロス、デッドクロス

%K が%D を下から上に抜いたとき（ゴールデンクロス）に買いシグナル、上から下に抜いたとき（デッドクロス）に売りシグナルとされています。

3. スロー・ストキャスティクス

%D が Slow%D（%D の移動平均）を下から上に抜いたとき（ゴールデンクロス）に買いシグナル、上から下に抜いたとき（デッドクロス）に売りシグナルとされています。

＜判断方法＞

売りシグナル

- %K または%D が 75%以上
- %K または%D が 80%以上の場合で、値が下降に転じたときは強い売りシグナル
- %K が%D を上から下に抜いたとき（デッドクロス）
- %D が Slow%D（%D の移動平均）を上から下に抜いたとき（デッドクロス）

買いシグナル

- %K または%D が 25%以下
- %K または%D が 20%以下の場合で、値が上昇に転じたときは強い買いシグナル
- %K が%D を下から上に抜いたとき（ゴールデンクロス）
- %D が Slow%D（%D の移動平均）を下から上に抜いたとき（ゴールデンクロス）

■ ウィリアムズ%R

このオシレーター指標は、-20 以上のときは買われ過ぎ水準、-80 以下のときは売られ過ぎ水準として判断します。

また、0、-100 の水準に張り付いた動きをガーベージトップやガーベージボトムと呼び、そのレンジの上下をブレイクしたときが強い売買サインとなります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- 0～-20 近辺を買われ過ぎの水準と判断
- ガーベージトップ（0 付近を何度もタッチ）してから-20 の水準を下抜けたとき

買いシグナル

- ・-80~-100 近辺を売られ過ぎの水準と判断
- ・ガーベージボトム (-100 付近を何度もタッチ) してから-80 の水準を上抜けたとき

■サイクロジカルライン

主に相場の買われ過ぎ、売られ過ぎをはかる指標です。短期の売買タイミングを図る手法として効果的です。

<判断方法>

売りシグナル

- ・75%近辺以上で買われ過ぎと判断

買いシグナル

- ・25%近辺以下で売られ過ぎと判断

■DMI

DMI とは、+DI、-DI、ADX の 3 本の指標を用いて相場の勢いや相場の方向性を見るためのオシレーター系のテクニカル指標です。

+DI、-DI、ADX の 3 本の線の位置関係により売買シグナルが判断されています。

<判断方法>

売りシグナル

- ・+DI が-DI を上から下に抜いたとき
- ・+DI が-DI よりも下にあるときは下降トレンド継続

買いシグナル

- ・+DI が-DI を下から上に抜いたとき
- ・+DI が-DI よりも上にあるときは上昇トレンド継続

ADX

トレンドの強弱を判断するために使用します。

ADX が上向きに転換したときをトレンドの開始と判断し、ADX が下向きに転換したときをトレンドの終了と判断します。25 以上でトレンドが発生、25 以下でトレンドが発生していない相場と判断します。

■ADXR

ADXがADXRを上抜けて推移している時はトレンドがある状態と判断し、ADXがADXRを下抜けて推移している時は、トレンドがない状態と判断します。

■RCI

指標が下降局面の後上昇し始めたら買いシグナル、上昇局面の後下降し始めたら売りシグナルという考え方です。主に、+80以上では買われ過ぎ、-80以下では売られ過ぎと判断します。

売りシグナル

- ・+80以上から+80以下に反落しているときに下降転換と判断
- ・+100近辺から下向きに反落しているとき

買いシグナル

- ・-80以下から-80以上に反発しているときに上昇転換と判断
- ・-100近辺から上向きに反発しているとき

■ROC

ROCは、反転の目安となる水準を見ることが出来る指標です。モメンタムと非常に似たテクニカルになります。

ROCが100以上のときは強気相場と判断し、ROCが100以下のときは弱気相場と判断します。ゼロラインが重要になり、上抜ければ強気転換、下抜ければ弱気転換として判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・中心線を上から下に抜けたとき

買いシグナル

- ・中心線を下から上に抜けたとき

■移動平均乖離率

移動平均線乖離率は、価格が移動平均線からどれだけ乖離しているかを数値化した指標です。移動平均に対する価格の乖離はやがて修正されるという考えに基づき、移動平均線からの乖離幅で買われ過ぎ、売られ過ぎを判断する指

標です。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・+1～+2 近辺まで乖離が広がるときは、買われ過ぎと判断し売りシグナルと判断

買いシグナル

- ・-1～-2 近辺まで乖離が広がるときは、売られ過ぎと判断し買いシグナルと判断

■強弱レシオ

別名「篠原レシオ」とも呼ばれ、相場の強弱や人気をはかる指標です。

相場のエネルギー状態を表す A レシオと人気を表す B レシオをそれぞれ単独または複合させて判断されています。

＜判断方法＞

売りシグナル

A レシオ：150%近辺

B レシオ：200%～300%近辺の推移から下に抜けたとき

AB 複合：B レシオが A レシオを上から下に抜けたとき

買いシグナル

A レシオ：60%近辺

B レシオ：30%～70%近辺の推移から上に抜けたとき

AB 複合：B レシオが A レシオを下から上に抜いたとき

■プライスオシレーター

プライスオシレーターは、期間の異なる 2 つの指標平滑移動平均線を差し引くことで算出される指標です。

一般的には、ゼロラインの上抜け、下抜けなどを売買シグナルとして判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・プライスオシレーターがゼロラインを上から下に突き抜けたとき

買いシグナル

- ・プライスオシレーターがゼロラインを下から上に突き抜けたとき

■DPO

DPO（DetrendedPriceOscillator）は、トレンドを排除し、相場の買われ過ぎ、売られ過ぎを判断する指標です。オシレーターの中でも特に相場過熱感を重視するテクニカルです。他のテクニカル指標と併用して使用するのが一般的です。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・DPO がゼロ以上からゼロ以下に下抜けたとき
- ・DPO が 5.0 を超える水準であれば、買われ過ぎと判断して売りシグナル

買いシグナル

- ・DPO がゼロ以下からゼロ以上に上抜けたとき
- ・DPO が-5.0 を超える水準であれば、売られ過ぎと判断して買いシグナル

■コポック指標

コポック指標は、一般的には長期相場を見るために用いられます。

主に、マイナスから指標が上向きに転じたら強気転換、プラスから指標が下向きに転じたら弱気転換と判断します。また、ゼロラインの上抜け、下抜けも売買シグナルとして判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・ゼロラインを上から下に抜けたとき

買いシグナル

- ・ゼロラインを下から上に抜けたとき

■CCI

トレンドの強弱を判断するテクニカル指標ですが、買われ過ぎ、売られ過ぎのオシレーター系としての使い方もあるテクニカル指標です。

+100 を買われ過ぎ、-100 を売られ過ぎと判断します。しかし、+100 を超えた時点を買い、その後 +100 を割り込んだ時点で決済、-100 を割り込んだ時点で売り、その後 -100 を回復した時点で決済と判断する見方もあります。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・CCI が+200 を上抜けたとき

- ・CCI が-100 以上から-100 を下抜けたとき

買いシグナル

- ・CCI が-200 を下抜けたとき

- ・CCI が+100 以下から+100 を上抜けたとき

■ボラティリティ

ボラティリティ（ヒストリカルボラティリティ）は、過去の相場変動の大きさを示す指標です。

ボラティリティの値が小さいときに相場の変動は小さく、大きいときに相場の変動は大きいことを意味しています。相場変動リスクを示す値としてもよく利用されています。

■ATR

アベレージ・トゥルー・レンジ（ATR）とは、ボラティリティー（変動率）の動向を見るものであり、売買ポイントは無く、相場の方向性とも無関係です。

日々の変動率が拡大傾向の時は ATR の数値は大きくなり、日々の変動率が縮小傾向の時は ATR の数値は小さくなります。

■可変 MACD

可変 MACD は、指数移動平均線の一種を用いて算出した MACD です。実態としては、VIDYA というテクニカルを使い計算した MACD になっています。

■シャンデモメンタムオシレーター

期間中の変動幅に対して、上昇幅と下落幅の大小を見極めることで、買われ過ぎ、売られ過ぎを判定し、トレンドの強さを判断します。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・相場が上昇基調にあるにも関わらず、CMO は下落基調にあるとき
- ・+50 を上から下抜いた場合は下落トレンドの可能性

買いシグナル

- ・相場が下落基調にあるにも関わらず、CMO は上昇基調にあるとき
- ・-50 を下から上抜いた場合は上昇トレンドの可能性

■チャイキンオシレーター

チャイキンオシレーターとは、Accumulation/Distribution(A/D ライン)の 3 期間の指数移動平均(EMA)と 10 期間の指数移動平均の差をプロットしたテクニカル指標です。

チャイキンオシレーターの代表的な使用方法は、相場とテクニカルの逆行現象での判断です。

相場が上値切り上げ時にチャイキンオシレーターが下落していれば弱気、逆に相場が下値を切り下げる時にチャイキンオシレーターが上昇していれば強気とみます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・相場が上値を切り上げているときに、チャイキンオシレーターが下落しているとき

買いシグナル

- ・相場が下値を切り下げるときに、チャイキンオシレーターが上昇しているとき

■アルティメットオシレーター

アルティメットオシレーター (UO) は、計測期間に 3 つの設定を用いて、相場サイクルのバリエーションに対応しようとするオシレーター系指標です。主に、相場と UO の逆行を売買シグナルとします。

一般的には、買いの場合は 30 以下、売りの場合は 50 以上の逆行現象を売買シグナルとして捉えます。

＜判断方法＞

売りシグナル

- ・UO の水準が 50 以上であり、レートが上昇しているのに UO が下がり傾向にあるとき（逆行現象）
- ・逆行現象が起きた時の UO のボトム値を確認し、ボトム値を下抜けたとき

買いシグナル

- ・UO の水準が 30 以下であり、レートが下落しているのに UO が上がり傾向にあるとき（逆行現象）
- ・逆行現象が起きた時の UO のボトム値を確認し、ボトム値を上抜けたとき

●証券投資は、価格の変動、金利の変動、為替の変動等により投資元本を割り込む恐れがあります。お取引の際は、約款・規定集、契約締結前交付書面、投資信託説明書(交付目論見書)、お取扱商品の重要事項の説明等をよくお読みいただき、商品特性やリスク及びお取引ルール等をよくご理解の上、銘柄選択、投資時期、投資スタイル等、投資の最終決定はご自身のご判断とご責任で行ってください。

●各商品等へのご投資には、各商品毎に所定の手数料が必要です。詳しくは当社の手数料ご案内ページ(<http://kabu.com/>)等をご参照ください。手数料には別途消費税がかかります。

●外国為替証拠金取引(店頭FX)は、元本や利益(スワップポイントを含む)を保証するものではありません。外国為替相場や各国通貨の金利の変動等により、元本を割り込むおそれがあります。外国為替証拠金取引は、お客さまが行う取引の金額が、その取引についてお客さまが預託しなければならない証拠金の額に比べて大きい額となっているため、損失の額が証拠金の額を上回る(元本超過損)おそれがあります。外国為替証拠金取引の取引手数料は次のとおりです。なお、取引にあたっては提示する売値と買値の間には差額(スプレッド)があります。スプレッドは通貨ペアごとに異なります。

●外国為替証拠金取引の取引手数料は次のとおりです。なお、取引にあたっては提示する売値と買値の間には差額があります。スプレッドは通貨ペアごとに異なります。

＜手数料＞

店頭FX:無料

●スプレッドは固定されたものではありません。市場の急変時(震災などの天変地異、各国中央銀行の市場介入、その他外部要因)や、市場の流動性が低下している状況(米国東部時間午後5時前後、年末年始、クリスマス時期など)、経済指標の発表前後などにより、スプレッドが拡大する可能性があります。変動が大きい相場になっている場合等は、スリッページが発生する可能性があります。スリッページとは、目視で確認できる価格とは相違する価格で約定する場合がありお客さまにとって不利なレートまたは有利なレートで約定することを総じた呼称です。

●外国為替証拠金取引をおこなうにあたって、お客さまが預託しなければならない必要証拠金は次のとおりです。

＜店頭FX＞

個人口座:通貨ペアにより1万通貨あたり25,000円～1,000,000円(当社の定める証拠金コース)または取引金額の4%のいずれか大きい額以上(レバレッジの上限は約25倍)

法人口座:通貨ペアにより1万通貨あたり25,000円～1,000,000円(当社の定める証拠金コース)または金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの為替リスク想定比率を取引金額に乗じて得た額のいずれか大きい金額以上(為替想定リスク比率とは、金融商品取引業等に関する内閣府令第117条第27項第1号に規定される定量的モデルを用い算出したものです)。この証拠金額は、取引対象である為替の価格変動に応じて変動しますので、レバレッジは一定ではなく明記できません。

●詳細および最新情報は当社ホームページ(<http://kabu.com/>)にてご確認ください。

手数料等およびリスクについてはこちら

(<http://kabu.com/company/pressrelease/info/escapeclause.html>)

◆ご意見・苦情について(当社以外の窓口)

特定非営利活動法人 証券・金融商品あっせん相談センター

電話:0120-64-5005

カブドットコム証券株式会社

金融商品取引業者登録:関東財務局長(金商)第61号

銀行代理業許可:関東財務局長(銀代)第8号

加入協会:日本証券業協会、一般社団法人 金融先物取引業協会